子宮は最初の環境である。

環境を汚すことは未来の命である胎児を汚染することになる。

胎児性の水俣病患者たちは人類への警告であった！

水俣市立水俣病資料館／同語り部の会／国立水俣病総合研究センター合同企画展

胎児性の水俣病患者たちが気がかり

警告　―　子宮は最初の環境である

期間 2009年12月15日 ▶ 2010年5月30日

会場 水俣市立水俣病資料館〈入場無料〉

〈お問い合わせ〉〒867-0055 水俣市明神町53 水俣市立水俣病資料館 電話 0966-62-2621　FAX 0966-62-2271

http://www.minamata195651.jp/

胎児性の水俣病患者たちが気がかり

警告 － 子宮は最初の環境である

胎児性水俣病　それは世界で初めてのことだった。
従来、胎盤は毒物を通さないと信じられていた。水俣病事件以前は揺るぎのない事実であった。しかし、化学物質という毒物は胎盤を通してしまい胎児を守ってくれない。このことを明らかにしたのは熊大医学部である。武内教授は二人の解剖から胎児性水俣病を明らかにし、原田正純は患者の母親の「同じ症状でしょうが」という言葉を証明し胎児期発病の水俣病と結論づけた。
原田正純は語る。
胎児性患者は人類への警告だった。「環境を汚すことは、未来のいのちである胎児を汚染することになる」という恐ろしいメッセージを発していた。
水俣病が公害の原点と呼ばれるのは、単に規模が大きかったとか、悲惨であったという理由だけではない。生産の結果、汚染された環境と食物連鎖に組み込まれた人間がメチル水銀中毒になった。この発生のメカニズムが人類初の経験であった。胎児性水俣病の子をもった母親たちは「私が食べた魚の水銀がこの子に移ったにちがいなか」と、医者たちの「毒物は胎盤を通らない」通説と対立した。母親たちが正しかった。母親の胎盤はもはや毒物から胎児を護ってくれないことが明らかになった。未来のいのちである胎児を宿す子宮は最初の環境なのである。

水俣病はその発生メカニズムの特異性、規模の巨大さ、悲惨さにおいて世界中に大きな衝撃を与えた。拍車をかけたのが胎児性水俣病の発見であった。母親の食べた魚介類に含まれていた有機水銀が胎盤を通過して、胎児にとりかえしのつかないハンディキャップを背負わせることになった。
本来なら、もし母親が毒物に汚染されたとしても、胎盤が防御壁の役目を果す。それは、母親が毒物によって障害を受けても、胎内の子孫の障害は最小限にしようとする種族保存の本能的な働きである。
何万年かの人類進化の歴史の中で、その環境との関係において獲得された、生存のための働きである。そのために人類は生きのびてきた。
しかし化学の進歩は、人類が環境の中で長い期間かかって醸成してきた胎盤の機能を無視してしまった。自然界に存在する毒物に対して自ら獲得してきた胎盤の働きが、もともとまったく自然界に存在しないか、あってもごく微量だったものに対しては無効であった。遺伝子は知らなかったのである。新種の化学物質を大量に生産することで環境汚染がおこる時、遺伝子はどう処理していいのかわからなくなるのである。その結果、新科学物質を自らの脳に蓄積したり、胎児にため込むことで母体外に排泄したり、理にかなわない行動をとってしまう。
現代の化学技術は、PCBなど、もともと自然界に存在しない化学物質を大量生産し、放射能やメチル水銀などを大量放出し、それが自らの輝かしい発展と思い込んだ。
胎児性水俣病、原爆小頭症、PCB胎児性、サリドマイド児はその犠牲の代表的なものである。母親の子宮は胎児にとってまさに環境であり、環境汚染は子宮内汚染につながることを人類に示す証人たちである。胎児性水俣病の子どもたちは必死に生きて、私たちにそのことを訴えつづけている。

そんな胎児性患者の子どもたちのこれからを気にかける人たちがいる。自らの具合の悪い体を抱えながら、胎児性のことを思い亡くなっていった杉本栄子をはじめ、多くの人たちである。
ユージン・スミスが撮影し、世界に衝撃を与えた写真がある。上村智子ちゃんと母親の良子さんの写真である。母は21歳で亡くなった智子ちゃんのことを、「私の毒をすいとってくれた。宝子です」と語る。
年を経るに従い具合が悪くなっている未解明の胎児性水俣病像がある。今も救済を求める人たちがいる。
胎児性水俣病患者の子どもたちは今も一人ひとりの命を生きている。化学物質による長期微量汚染の恐れを訴えている。人類への警告を発している。私たちは受け止めることができるだろうか。

２００９年１２月